

サウロの回心

使徒言行録 Act9・1~19a

2019. 1. 20

熊取教会

5 ¹ さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、² ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。³ ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。⁴ サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。⁵ 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。⁶ 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」⁷ 同行していた人たちは、
10 声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。⁸ サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。⁹ サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。
¹⁰ ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。¹¹ すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。¹² アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」¹³ しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。¹⁴ ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」¹⁵ すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。¹⁶ わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」¹⁷ そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」¹⁸ すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、¹⁹ 食事をして元気を取り戻した。

【回心の物語】

25 サウロの回心。回心とは神のご人格に触れて、こころの向きを変える個人的体験をいいます。サウロには劇的な回心の出来事がおこりました。回心の出来事をとおして、私たちは神に向けて作り変えられ、新しい生き方をはじめます。今日はサウロの回心について学びます。それと、もう一つ、ジョン・ウェスレーの回心の物語を彼の日記から短く学びたいと思います。ジョン・ウェスレーの回心はサウロほど劇的ではありません。目立たない、静かなものです。私たちも多くのかたが、夫々に回心の出来事を経験しておられるのではないかとおもいます。それを証などで語っていただいておりますが、今日はこの回心の物語を学んで、夫々の方が経験なされた、あるいは、これから経験なされる回心の出来事に心を向けてほしいと思います。

【教会の原点】

35 イエス・キリストの名による礼拝が 2000 年間伝えられてきたのは、もちろん、イエス様ご自身の十字架の犠牲と、復活の出来事によります。12 人の使徒を立て、弟子たちを御許に置いて、身をもって神の愛を示されました。神の愛の最も激しく美しい形は、十字架による犠牲でした。私たちの命を贖い、清めるために、自ら贖いの犠牲として、十字架で主は命を捨てました。それで終わりであれば、イエス様の愛が 2000 年の時を超えて私たちのところに届くことはなかったでありま

しょう。十字架で死んで、墓に納められたイエス様の亡骸がなくなっていた。それだけではなく、多くの弟子たちが、その後、イエス様の声を聞き、お姿を見る、という経験をしています。私たちの日常の出来事を越えた、何かが起きた。それを聖書は復活、と呼んでいます。歴史上ただ一度の出来事。

5

【パウロが伝えた福音】

それを、パウロは、こう記しています。コリントの信徒への手紙一。第十五章です。

15:1 兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。

10

福音。「うれしい知らせ」であります。その知らせを思い起こすと、心があたたかくなるような。そんな知らせ。それは例えば合格通知であるとか、好きな人への告白が、受け入れられた返事のような、そんな知らせ。パウロが言う福音は、「神の愛が私たちに注がれている」という知らせです。

【もっとも大切な伝承】

15

15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、

初期の教会から伝えられたこと。最も大切なこととしてつたえられたこと。重要な福音。その第一は、キリストが、私たちの罪のために死んだ。私たちの罪を担って、私たちに代わって死んだ。ということ。だから、私たちは、神の前に立つ日を畏れなくてもよい、ということです。

20

そして、15:4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、そして、

15:5 ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。15:6 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。15:7 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、

15:8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

25

このコリントの信徒への手紙は、間違いなく、パウロ本人が書いたものと言われています。疑問の余地はありません。パウロはここに、自分の経験を語っています。「私にも、復活のイエスが現れて下さった。」しかも、パウロは教会の敵でした。教会迫害に最も中心的な役割を果たしました。その自分にまで、主イエスはご自分を現わしてくださった。

15:9 わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。

30

【ダマスコ途上】

パウロがサウロと呼ばれていた頃、復活のイエス様に出会ったのは、ダマスコへの途上でした。今日のテキストにその出来事が記されています。この出来事によりパウロは伝道者となり、教会にとつて大変重要な働きをしました。使徒言行録の中に、この出来事は3回しるされています。

35

今日のテキストの小見出しの下に、(使徒 22:6~16 26:12~18) とありますが、それらには、今日のテキストの出来事が、パウロの弁明として記されています。これらの他に、ガラテヤの信徒への手紙1章に、神が御子を私に示して下さった、とパウロ自身がしるしています。この「ガラテヤ書」は新約聖書の中で最も早く成立した文書のひとつです。これらの記録を比較してみると、小さな部分では矛盾するような点もありますが、パウロが復活の主ご自身に出会った、という一番肝心

40

な点に違いはありません。そこで今日は使徒言行録9章に基づいて学びます。パウロがまだ「サウロ」と呼ばれていた頃の出来事です。

【ダマスコ途上】

- 5 1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、
2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わ
ず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。

ステファノが石打で殺されたとき、皆の上着の番をしていた青年サウロ。彼は熱心で厳格なユダヤ教徒であり、名高いガブリエルの弟子でした。彼はファリサイ派の教えを守り、厳格に律法を守ろうとしていました。だから、「イエスが復活した、イエスがメシアだ」と主張する弟子たちを放っておけなかった。それはとんでもない大嘘であり、神を冒瀆する重大な罪です。そこで彼は祭司長たちから権限を受けて、キリスト者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしました。また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、迫害の手を外国の町にまでも伸ばした。」と後に述べています。さて、彼はこのとき、大祭司に委任状をもらって、信徒たちを見つけてエルサレムに連行するために、ダマスコに出かけました。ダマスコは、エルサレムから北へ230キロほど。シリアの首都です。雪を頂くヘルモン連峰の東に広がる肥沃な場所だそうで昔から、たくさんのユダヤ人が住んでいて、りっぱなユダヤ教の会堂がありました。砂漠に隣接するオアシスの町です。

20 【主との出会い】

ダマスコに近づいたとき、サウロは激しい不思議な経験をします。

3 サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。

「サウル」と呼び掛けていますが、これは語尾変化（呼格）です。彼は自分を呼ぶ声を聞いた。光に打たれて倒れ、サウル、サウル、と呼び掛ける声を聞いた。この出来事を物語る、9章、22章、および26章に共通してそう記されています。その呼びかけは彼の中に生まれたものではなく、彼の外から来た。サウロはイエスの弟子を取り締まっていましたが、イエス様は「なぜ、わたしを迫害するのか」と呼び掛けました。弟子たちが苦しむことは、イエス様も苦しむこと。私たちの苦しみはイエス様の苦しみ。私たちの悲しみは、イエス様の悲しみ。「何故、わたしを迫害するのか」
30 そうサウロに呼びかけました。

5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。

8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

サウロは、イエスの弟子たちが語る、「復活」を、荒唐無稽。ばかばかしい愚かな話と思っていたでありましょう。彼はファリサイ派の教育を受けていましたから、ファリサイ派の教えに従って復活を信じていたでありましょうけれども、亡骸が墓地から消えて、この現実の世界に復活する、などということは、ばかばかしい話だと思っていたに違いありません。十字架で死んだイエスが、
40 復活したなどという話は受け入れがたい。けれども、サウロは、このダマスコへの途上、イエス・

キリストの人格に触れる経験をした。キリストの方から声をかけて、サウロに話しかけて下さった。そして、そのサウロは二度と、元のサウロに戻ることはありませんでした。その経験がどれほど驚くべきものであったか、は、その後のパウロとしての歩みが証明しています。あれほど迫害を続けていた彼が、苦しみに続く苦しみの中で、三回の大伝道旅行を行い、沢山の教会を残しました。1
5 3巻の手紙を残し、それは後の教会にまことに大きな影響を与え続けました。そして最後には殉教したと伝えられています。

【アナニアの見た幻】

10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。

アナニアは意に反する命令を受けました。 恐ろしいサウロに会いに行け、というご命令。

11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。

12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、
15 幻で見たのだ。」 アナニアの見た幻とサウロの見た幻が照らしあってひとつの出来事として形をとろうとしていました。

しかしアナニアは答えました「とんでもないことです」

サウロは教会の敵としてすでに有名でした。彼が今ダマスコに向かっていることも、何の為にダマスコに向かっているかということも、エルサレムから伝えられて、すでにダマスコの弟子たちに届いていました。自分たちをとらえて、エルサレムに引っ張ってゆくために来る。だから、「サウロのところを訪ねよ」と命じられても、恐ろしくてできません。 15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示さう。」

25

【サウロとアナニアの出会い】

主は彼を選び、異邦人への伝道者として立てました。彼はそれまでの歩みと全く逆の方向へと、歩み始めることとなりました。使徒言行録を通して見る彼の歩みは、まことに苦難に満ちたものです。この主の言葉を聞いて

30 17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」

18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19 食事をして元気を取り戻した。

35

【サウロの回心】

この「サウロの回心」できごとは、紀元 33 年頃から 36 年ころではないか。主イエスの十字架の死と復活から数年後のできごとであろうとされています。生きて働かれる主に触れて、サウロ、後のパウロは全く新しく作り変えられて歩み始めます。主イエスが復活の後、弟子たちにご自分を現わされた。そのように、サウロにも主は現れて、彼の人生を全く異なったものに変えてしまいまし

40

た。サウロの大きな転換点、それがこのダマスコ途上の経験であり、サウロの回心のできごとです。この出来事の後、サウロは主と共に歩み始めました。彼は主と共に歩み、殉教するまでのその後の人生に彼は主から大きな喜びを頂いています。ロマ8:35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

5 かれはまことに多くの艱難にであいましたが、しかし、イエス様の十字架と復活の出来事から目を逸らすことなく、最後まで歩きました。それほど、神の愛は確かなものでした。

【ジョン・ウェスレーの回心】

10 多くの方の証をとおして、それぞれの方が、いつまでもこころに残る宗教的体験をしておられることがわかります。私たちが主の愛を知る原点となった経験。私たちの回心経験です。

サウロのような激烈な経験ではなく、静かな回心経験として知られているのが、ジョン・ウェスレーの回心です。ジョン・ウェスレーは、メソジスト教会の創始者、18世紀の信仰復活運動を中心となって進めた人です。メソジストの伝統を持つ教会は教団の中にもたくさんあります。関西学院を創立したランバースも、メソジスト派でした。

15 ジョン・ウェスレーはサウロのように、教会に対立している人ではなくて、牧師でした。彼は生涯日記をつけ続けており、それが後に公開されているので、回心経験の日付までわかります。1738年5月24日（日）の日記にこう記されています。

「夕刻、私はひどく気が進まなかったけれども、アルダスゲイト街でのソサエティの集会に行ったところ、そこである人がルターの『ローマ人への手紙』の序文を朗読していた。9時15分前ごろであった。彼がキリストを信じる信仰を通して神が心の内に働いてくださる変化について説明していたとき、私は自分の心が不思議に熱くなるのを覚えた。私は、救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼した、と感じた。神がこの私の罪を、このわたしの罪さえも取り去ってくださり、罪と死の律法から救ってくださったという確証が、私に与えられた。」

25 彼はこの時、キリストに、キリストのみに信頼し、私の罪を、このわたしの罪さえ取り去りたもうと信じることができました。救いの確証を得た。ここから英国にリバイバルが始まり、全世界へと広まりました。私たちの教団も、彼のこの回心経験と無縁ではありません。

【それぞれの回心経験】

30 ウェスレーの回心経験は、サウロのように、劇的なものではなく、静かな、内的な経験です。主はそれぞれの人に、最もふさわしい、回心の時を与えてくださいます。それは外から来る。どうぞ皆さまそれぞれに持つておられる、主の現れのご経験を大切に、いつも心に覚えるようにしてください。それぞれの方々がもつ、イエス様の人格との出会いの経験を、大切にして、イエス様と共に歩む生涯を、共に歩み続けたいと思います。